慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラグマティズムの英語教育論的含意 : R. Rortyの自文化中心主義・語彙論が示唆する新たな英語教育パラダイムの地平
Sub Title	Implications of pragmatism in English educational theory : a new paradigm of English education derived from R. Rorty,s 'ethnocentrism and lexicology'
Author	山中, 司(Yamanaka, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2007
Jtitle	Keio SFC journal Vol.7, No.2 (2007.) ,p.68- 78
JaLC DOI	10.14991/003.00070002-0068
Abstract	英語教育が20世紀の終盤より大きな質的変貌を遂げつつある中、それに携わる全ての者は、工夫や効率化のみに視点を向けるべきではなく、そのパラダイム・シフトの可能性をも見据えた、根本的な議論を交わすべきである。本論文は新たな英語教育のパラダイムをプラグマティズムの観点から論じ、具体的な英語教育の理念とそのあり方を検討した。その際、R. Rorty の「希望の哲学」を英語教育論のコンテクストで捉え直し、自分の興味や関心に基づいたコンテンツを自らが発信する「プロジェクト発信型」の英語教育に新たな意義を認めた。 English education in Japan has been in the midst of drastic change from the latter half of the twentieth century onwards and those engaged in the field should now engage in far-reaching debate in the light of this possible paradigm shift in English education, rather than merely considering issues of practicality and efficiency. This article considers a new paradigm in English education in Japan from the perspective of pragmatism, both theoretically and practically. Reinterpreting Rorty's "philosophy of hope" in the context of English education, this article affirms the significance of a project-oriented English education method where messages are transmitted according to the interests and values of the individual.
Notes	自由論題 研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-0702-0600

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

◆研究論文◆

プラグマティズムの英語教育論的含意

R. Rorty の自文化中心主義・語彙論が示唆する新たな英語教育パラダイムの地平

Implications of Pragmatism in English Educational Theory

A new paradigm of English education derived from R. Rorty's 'ethnocentrism and lexicology'

山中 司
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程
日本学術振興会特別研究員（DC2）

Tsukasa Yamanaka
Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (DC2)

英語教育が 20 世紀の終盤より大きな質的変貌を遂げつつある中、それに携わる全ての者は、工夫や効率化のみに視点を向けるべきではなく、そのパラダイム・シフトの可能性をも見据えた、根本的な議論を交わすべきである。本論文は新たな英語教育のパラダイムをプラグマティズムの観点から論じ、具体的な英語教育の理念とそのあり方を検討した。その際、R. Rorty の「希望の哲学」を英語教育論のコンテクストで捉え直し、自分の興味や関心に基づいたコンテンツを自らが発信する「プロジェクト発信型」の英語教育に新たな意義を認めた。

English education in Japan has been in the midst of drastic change from the latter half of the twentieth century onwards and those engaged in the field should now engage in far-reaching debate in the light of this possible paradigm shift in English education, rather than merely considering issues of practicality and efficiency. This article considers a new paradigm in English education in Japan from the perspective of pragmatism, both theoretically and practically. Reinterpreting Rorty's "philosophy of hope" in the context of English education, this article affirms the significance of a project-oriented English education method where messages are transmitted according to the interests and values of the individual.

Keywords: Rorty、プラグマティズム、英語教育論、自文化中心主義、語彙論

はじめに

「英語が使える日本人」、「実践的コミュニケーション能力」といった表現が象徴するように、現代の日本の英語教育一般に期待されているものは、20 世紀の訳読偏重に代表される受信・詰め込み式の外国語教育とは明らかに異なってきている[1]。一部に未だ見られる「テスト信仰」においてさえ、現行の国内外で見られる英語能力アセスメントの多くは、それが単に英語の「知識」を問うものではなく、実際の「使用」の力、すなわち言語運用能力を問うものが格段に多くなってきた（山中、2006）。

しかしながらその一方で、そうした英語授業における「コミュニケーション能力」という概念についての理論的な解釈おいては、現状ではほとんど合意が見られないのが実情である[2]。社会言語学や応用言語学の分野でこれまで多くの議論やモデルの提案が行われてきたが（Canale and Swain、1980；Bachman、1990；McNamara、1996 等）、それらの中でも統一的な見解は見られず、議論は抽象的な次元にとどまっているにすぎない（金谷他編、2003）。またこの理念上の「混乱」は、日本の英語教育における意義をも曖昧にさせている。「コミュニケーションを重視する」という総論では一応のコンセンサスが得られていると思われる一方で、そのための日本国内における英語（教育）論は理論化が遅れており、具体的な方法論に十分な論拠を与えるまでには至っていない[3]。

英語教育が 20 世紀の終盤より大きな質的変貌を遂げつつある中で、それに携わる全ての者は、その一部を改善することや、工夫や効率化のみに視点を向けるべきではない。むしろ、英語教育のパラダイム・シフトの可能性をも見据えた、抜本的な議論が積極的に交わされてしかるべきなのではないだろうか。

本論文はこうした問題意識に基づき、新たな英語教育のパラダイムをプラグマティズムの観点から論じ、具体的な英語教育の理念とその実践のあり方を検討する。その際、R. Rorty[4] の「希望の哲学」を英語教育論のコンテクストで捉え直し、その意味するところを具体的に論じてみる。

知識や理論を基礎づける確実な基盤や、永遠の本質は存在しないと主張する Rorty のプラグマティズムは、「反基礎づけ主義」や「反本質主義」と呼ばれる概念でしばしば代表されている。Rorty の主張するプラグマティズムとは、科学や哲学における「基礎づけ」や「確実性」が検証不可能で間違い得ることを認めながらも、個人がその都度、特定のコンテクストの中で世界に対し影響力を持って行動できると考える。このような意味で Rorty の主張するプラグマティズムは、ポストモダン特有の悲観的で懐疑的なビジョンを克服し、創造的で社会的な知性を用いて希望のある改革を建設的に推進しうるものとして、一定の評価がなされているものである（柳沼、2002、pp.209-210）。

このようなプラグマティズムの哲学を、これからの日本が目指していくであろう「コミュニケーション重視の英語教育」というコンテクストで読み直してみる時、そこにいかなる含意と示唆を得ることができるだろうか。本論文はとりわけ Rorty のプラグマティズムの中でも、英語教育との直接的接点が深いと思われる「自文化中心主義」と「語彙論」に焦点を当て、英語教育論の理念としてのあり方を描き出すことを試みる。

プラグマティズムに基づいた理想的な英語教育とは、自分の信念を正当化し、「拡張され開かれた会話」（Bernstein、1983、p.2）を通して、より豊かな共同社会の連帯を築くことであり、そのためにはコミュニケーションを通し、その都度生み出される感情・欲求・信念の「受肉した語彙（incarnated vocabularies）」（Macpherson、1977=1978、p.39）を用いることである。そしてそれは継続的に再記述し再編成される。本論文はこうした一連のプラグマティズムの哲学が、参加者の興味や関心に基づいたコンテンツを自らが発信する「プロジェクト発信型」（鈴木、2003）の英語教育とその理念と方向性を共有し、方法論に対し有効な論拠を提供し得るものであることを提示する。そのため本論文では、Rorty の解釈から引き出される含意を探ると共に、理念から具体に至るまでの新しい英語教育のパラダイムにな

りうる議論の叩き台として、「プロジェクト発信型」の英語教育との整合性を検討する。これを通して、本論文が日本の英語教育、とりわけ大学英語教育環境における新たな論点を提示し、哲学的含意、方法論的示唆をもたらすことを目指す。

英語教育はこれまで、世界中に数多くの実践と評価、その膨大な研究の蓄積を見せながらも、「言語」や「コミュニケーション」に関する根本的、かつ哲学的論考に欠け、枝葉の方法論に固執しすぎてきた傾向がある。なるほどこれが「言語学」と「言語哲学」の違いだと言ってしまえばそれまでかもしれないが[5]、こうした学問の線引きが今後どこまでその正当性を持ち得るのか、とりわけこれからの超領域的な問題解決のアプローチが期待される21世紀においては、甚だ疑問を感じざるを得ない。本論文はこの問題に敢えて正面から取り組むことで、新たな議論を巻き起こし、研究の端緒を開きたい。これまで哲学や言語哲学で取り扱われた議論を英語教育のコンテクストに置き換え、何らかの方法論の確立を模索した研究は極めて少数である。またさらにはRortyの哲学を英語教育の文脈で論じ直したものはほぼ皆無であり、この意味では本論文は英語教育に対し、一定の理論的貢献を果たしうるものであると考えたい。

1　プラグマティズムと英語教育論

本章ではRortyが考えるプラグマティズムを英語教育の文脈で再解釈し、それが日本の英語教育が方向性として依拠するに相応しく、意義と示唆を持ち得ることを明らかにする。

米国で発展したプラグマティズムの哲学は、各文化の現状と現実に柔軟に対応できる理念を提供するものであり、これは新たな英語教育の理論的依拠を模索する際に有意義であると思われる。プラグマティズムというイデオロギーを、理論的、あるいは抽象的な哲学的論議にとどめておくことをせず、英語教育という具体的な文脈においてその含意を議論することで、現実的な英語教育方法論のあり方を検討する。また議論に一層の提言性を持たせるため「プロジェクト発信型」の英語教育方法論を取り上げ、プラグマティズムの観点から、その方法論の意義を議論する。

なお以降の議論で用いる「プロジェクト発信型」の英語教育に関して、ここにまとめて整理しておく。これ以後は文脈に応じて、「プロジェクト発信型」を以下の「理論（理念）」、「実践（教育方法論）」のそれぞれの意味で用いている。

「プロジェクト発信型」の英語教育[6]

[理論（理念）]

英語の非母語話者としての日本人が、英語という媒介言語を用いて自分たちのプロジェクトを国内外の人々に発信する。文化の「発信型」（鈴木、1985）の理念に基づき、独自のコンテンツ・視点によるプロジェクトを実施する。参加者の興味・関心に基づいたプロジェクトを行い、英語を学ぶのではなく、英語で発信し、コミュニケーションを行うことに主目的を置く。その際、交渉や説得の過程を経ることが考えられ、そうしたコミュニケーションを前面に据えた教育を行うことで、英語を実際に使用する「場」を創出する。ただしその際に用いる英語は、社会言語学的な意味におけるグローバル英語の有用性を鑑みたものであり、単に欧米を中心とする母語話者に範を求めるものではない。今持てる、自分たちの語彙、文化に編集された独自の「英語」を発信の際に積極的に用い、説得・交渉による理解を試みる。こうした教育を通して、日本人としてグローバル社会に堂々と参加する術を身につけることを究極的な目標とする。

[実践（教育方法論）]

上記の理念を実現するため、授業では参加者の興味や関心に基づいたプロジェクトを立ち上げ、個人やグループでリサーチを行う。リサーチは発信するために行い、一定の期間を経てプレゼンテーションやディベート、シンポジウムを行う。その過程のディスカッションにおいて、あるいはプレゼンテーションにおいて、交渉や説得等のコミュニケーション活動を通し、参加者は英語を用いた実際の場を多く体験することになる。発信先はク

ラス内とは限らず、海外やオンライン上のコミュニティも含め、今持てる英語で積極的にコミュニケーションをすることが求められる。プロジェクト授業においては発信する手段としての英語そのものは副産物的に後から獲得されると考え、英語そのもののブラッシュ・アップは、プロジェクト授業と並行して行われるワークショップにて担われる。プロジェクト授業ではコンテンツを徹底的に追求し、参加者の主体性、創造性を縦横無尽に発揮する場の創出を実現する。言わば、個々の発信活動を英語で行うのがプロジェクト授業であり、その英語のレベルは問わない。いかなる言語能力のレベルに参加者がいようと、プロジェクト授業は実現可能である[7]。

Rorty は James や Dewey、そして Peirce によって形作られていったプラグマティズムの伝統に（Rorty、1982=1985）、哲学の言語論的転回と解釈学的転回の成果[8]を取り入れることで、新たなプラグマティズムである「ネオ・プラグマティズム」を構築した（柳沼、2002、p.154）。ここではまず Rorty のその特徴を概観し、英語教育への含意を引き出すための下準備を行いたい。

柳沼（2002、pp.154-157）によると、Rorty のネオ・プラグマティズムは、Peirce、James、Dewey のプラグマティズムに共通する「可謬主義 (fallibilism)」と「歴史主義 (historicism)」という概念を受け継ぎ、さらに「反表象主義 (anti-representationalism)」、「反本質主義 (anti-essentialism)」、「反基礎づけ主義 (anti-foundationalism)」という新たな概念を付け加え、ポストモダンと関連した新しいプラグマティズムを展開しているとしている。以下それら 5 つの概念の要点を簡潔に提示する。

1.「可謬主義」
探究や理解および行動に対して唯一正しい方法はなく、また探究によって真理や有益な知識にどれほど近づいたかを知る方法もないという主張。Dewey の実験主義に基づく。

2.「歴史主義」
諸々の観念および社会実践は特定の歴史的文脈から発生するものであり、偶発性や暫定性に依拠するという主張。歴史性を強調することで、コンテクストや結果に注意を向けさせる。

3.「反表象主義」
表象の正確性を決定する方法は存在せず、あらゆる科学的・道徳的・社会的・政治的な真理や理論は単なる形而上学的な記述や「物語」であり、偶発的な語彙が構成するという主張。

4.「反本質主義」
伝統的な哲学が主張する絶対的真理、共通の道徳原理などを疑い、独立した真実や本質は存在しないという主張。真理を「役立つもの、有益なもの、信じた方がよいもの」と捉える。

5.「反基礎づけ主義」
観念や知識が構築され得る確固とした基盤や土台などは存在しないという主張。全てが時間的で状況的な相対性を持ち、普遍的な真理概念の正当性や語彙の特権性は否定される[9]。

このように Rorty は、包括性やグランド・セオリーを否定し、歴史的偶然性から免れない哲学、すなわち「基礎づけられない希望（ungrounded hope）」を抱える新しいプラグマティズムを展開したと言える。これはプラトン以来の西洋哲学が永く依拠した基礎づけ的な伝統に対する終焉を説くと同時に、プラグマティズムをポストモダンの文脈における評価に繋げるものであった（柳沼、2002、p.149）[10]。

Rorty のプラグマティズムは、主観主義的な認識論や自然科学的な方法論による、非歴史的で脱文脈的な本質や真理を探究するのではない。歴史的、局所的な解釈に基づいて、何時いかなる状況でどの選択や決定が最善であるかという問題に焦点を当てながら民主的でリベラルな社会のあり方を探究する（154）。こうした現実やその変化に対し柔軟で積極的な意味づけを与えることができる Rorty の哲学は、政治や社会生活の改善に役立つのみならず、教育という文脈においても大いに示唆を与えるものである[11]。すなわち Rorty のプラグマティズムは、混

沌とした教育の現状に一筋の希望を与えるものであり、前向きで積極的な解決のための哲学を提示するものである。これはたとえ現在の言語・英語教育が混乱の中にあり、既存のパラダイムそのものが新たなものとの断絶の様相を呈しているとしても[12]、我々は恐れる必要はなく、まさにプラグマティックにふるまうべきであることを力強く示しているのである。以下 Rorty の哲学を形作る「会話の継続」、「連帯 (solidarity)」という概念をめぐる議論について若干の言及を加えることで、彼の「希望の哲学」についての輪郭を一層明らかなものにしておきたい。

Rorty は「会話 (conversation)」を探究に課せられた唯一の拘束とし (Rorty、1982=1985、p.362)、「会話の継続」を強調することで民主的で寛容な連帯を目指そうとする。プラグマティズムの立場から真理の「可謬性」や「偶然性 (contingency)」を受け入れた上で、「私たち自身の仲間から文化を継承し、彼らと会話することが、私たちにとって唯一の導きの根拠となる」(Rorty、1982=1985、p.368) と考えている。そこで要望されるのは、仲間の探究者とともに具体的な選択肢が持つ相対的な魅力について語り合うことである(柳沼、2002、p.151)。つまり Rorty の哲学は、(これまでの) 体系的哲学やイデオロギーを相対化することで多様な価値を創造し、共通の関心事について自由に見解を交流する会話を続けることを重視するのである (1982=1985、p.379)。Rorty が重視する会話とは、多様性に対する寛容さであり、正確な表象の否定であり、その代わりに自らの言葉で物語ることへの尊重である。可謬性を肝に銘じ、暫定的に妥当な結論をその都度求めて具体的なプロジェクトへ共同で参加することこそ、Rortyのプラグマティズムにとっては重要なのである。

またこの会話の重要性は、Rorty の哲学を語る上で極めて重要な概念の一つである「連帯」の意識と密接に結びつく(柳沼、2002、p.173)。Rorty が語る「リベラルな連帯」とは、先に言及した本質主義や基礎づけ主義の否定を前提としながらも、苦痛や苦悩を感じる能力だけは無前提かつ普遍的に共有し得ると考え、人々のなし得る最善のこととは他者との想像的な同一化であるという主張である (柳沼、2002、p.167)。Rorty は寛容な精神の中で、相互の多様性や差異性を認め合い、次第に「私たち」の範囲を拡大する中でリベラルな社会的連帯が実現していくと考える (柳沼、2002、p.168)。会話を通してできるだけ多くの間主観的な合意を創り出し、コミュニティや連帯の諸概念を実際に活用することができるようになるとする。Rorty の哲学が、まさに我々に一つの希望を見出させるものであると言える理由がここにある。

Rortyのプラグマティズムとは、自分たち(の文化)を議論の出発点に据え、他者への寛容なまなざしと、積極的な自己変革を踏まえた、絶えざる更新のプロジェクトであると言えるだろう。具体的な物事へ取り組む姿勢こそがまず何よりも先に存在し、なるべく多くの他者の声を取り入れながら、そこに連帯による希望を見出していくのである。そうであるならば、この Rorty の哲学は、これからの日本の英語教育にとって理論的、あるいは実践的な示唆を与えうるものにはならないだろうか。教育とは、その潜在性や可能性を否定することでもなく、取り組む者たちの先行きを敢えて暗くすることでもない。同時に、欧米に追随する、すなわち中心を自分たちとは異なった位置に置き、わざわざ自らを周縁に据えることでもないはずである。さらには、時間や空間に対して絶対的かつ唯一の「英語」が存在するわけでもなく、普遍的な「コミュニケーション (パタン)」が存在するわけでもない。そうであるならば、Rorty のプラグマティズムが示す「会話の継続」や「連帯」をはじめ、「可謬主義」、「歴史主義」、「反表象主義」、「反本質主義」、「反基礎づけ主義」という概念が描く「基礎づけられない希望」を英語教育のコンテクストで具体的に取り上げ、何をどうすることが英語教育における「希望の哲学」となるのか、その意味するところを探ることは、これからの日本の英語教育に現実的な方略を示すことにつながるのではなかろうか。

次章では、本章での概念的な理解を踏まえた上での、具体的に英語教育へ関わるであろう側面を取り上げ、叩き台としての一つの英語教育のあり方、「プロジェクト発信型」の英語教育の検証を通して、こ

れからの日本の英語教育論への含意を探る。

2　Rortyの自文化中心主義と語彙論が導き出すもの：プロジェクト発信型英語教育への新たな意義づけ

前章にてRortyの哲学であるネオ・プラグマティズムを概観し、彼の「希望の哲学」が、これからの英語教育論において現実的かつ前向きな理念と実践への示唆を与えうる可能性を指摘した。本章では、Rortyのプラグマティズムの中でもとりわけ英語教育に対し具体的な議論を呈すると思われる「自文化中心主義」と「語彙論」を取り上げ、その含意から英語教育への具体的な提示を行う。結論として、発信者が「自らの」「語彙」を用いて、メッセージを創造する「プロジェクト発信型」の英語教育は、Rortyのいう「伝統的に周縁化された他者を『私たち』の範囲に含めていこう」とする概念を共有するものであり、「より大きい間主観的な合意を実現する存在様式や行動様式を選択し、共同社会の連帯を拡張することができるもの」(柳沼、2002、p.173)でもある。こうした理想を実現する上で、「プロジェクト発信型」の英語教育が仮に最善のものではないとしても、「ネイティブ追従型の英語教育（コミュニケーションを重視すると一面で謳いつつも、現実には他者の共同体に中心がある教育論)」とは一線を画していることを意義として認めるべきである。

Rortyのプラグマティズムは、日本人が日本人のために行う英語教育の正当性、そしてその特異性・独創性を堂々と世界に発信するための理論的根拠となりうる可能性がある。錯綜する英語教育の理念、そして出口としての具体的実践やその成果の難しさに対して、英語教育に関わるものは、何も臆することなく、堂々と今できることに現実的に対処し、会話を続ければよいことをRortyの哲学は語る。メッセージの中心、発信基地はあくまでも「自分（たち)」であり、「開かれた会話を通して多くの人々と交流して『私たち』の範囲を拡大するプロジェクト(173)」へ学習者それぞれが自らの「語彙」をもって参加することがこれからの日本の英語教育のあり方であることをRortyの哲学は示唆している。その際の英語は「正確さ（accuracy)」や「流暢さ（fluency)」とは異なった、「より興味深く実り豊かですぐれた新しい語り方」である限りどんな英語でも構わない。これこそが参加型のグローバル英語であり、もはやメガ・ピジンと化した英語という媒体言語を用いた言語教育の未来的なあり方であろう。以下Rortyの自文化中心主義と語彙論を概観し、その意義を探ることで上記の結論に対する論拠を提示する。

Rortyの自文化中心主義とは、歴史的文脈の中に根づく自国の文化的な統一性を重視し、私生活を中心としながらも、自由と平和と富に加えて他者に寛容なコミュニティづくりを目指すものである（Rorty 1991: 190)。なるほど確かにこのRortyの主張に対しては、存在を「記述」・「言語」・「ヴォキャビュラリー」に対して常に相対的にするが故に「存在論的相対性」（ontological relativity）を引き込み、悪しき「相対主義」に陥ると誤解し批判する動きも一部では多い（渡辺、1999、p.132)。しかしながらあくまでもRortyは、「会話」の出発点を「自分たち」に定めていることを主張しているに過ぎないのであり、自分たちが主体となって納得できるような希望や、解決を見出せない相対主義に対してははっきりと否定の立場を示している。すなわち、Rortyの言う自文化中心主義とは、単に「今いるところからスタートせよ[13]」の別称に過ぎない（渡辺、1999、p.168）ことを我々は十分に認識しておくべきである[14]。

さらにRortyは、より大きな間主観的な合意や共同社会の連帯を可能にするため、「永遠の非人間的な拘束に従属することではなく、むしろ可謬的で一時的で人間的なプロジェクトに参加すること（Rorty、1982=1985、p.369)」を強調する（柳沼、2002、p.173)。すなわち重要なのは、発信者でありプロジェクト参加者一人一人の主体性であり、積極的な会話へのコミットメントである。ここには基礎づけられた「（もはや）議論の余地のない」空間が広がっているのではない。継続的で未確定、だからこそ積極的に他者とコミュニケーションをとり、間違いながらも寛容に連帯を模索する「終わりのない(大きな）プロジェクト」を常に実行し続ける生身の人間がいると読み替えることができるだろう。

Rortyの語彙に対する考え方も上記の自文化中心主義、さらには自身のプラグマティズム全体を貫く考えを踏襲したものであり、新しい語彙や語り方を創造したり、新しい行動様式を構想したりすることに貢献する（柳沼、2002、p.159）ことを主張する。Rortyが考えるプラグマティズムにおける主要な課題とは、常識化した観念や語彙の理解が現在の需要には十分に対応できなくなったことを示したり、ある状況において最も役に立つ観念や語彙を見つけたり、それらの観念や語彙を時代に合わせて絶えず新しくしたり修正したりすることにある（柳沼、2002、p.150）のである。つまり、Rortyの語彙論は言語学で言うところの規範性（prescriptiveness）を正面から否定したものであり、「いかなる記述・ヴォキャビュラリー・言語も、存在Xに対する存在論的特権を請求できない」（渡辺、1999、p.133）。そしてその一方で、規範の逸脱から始まる創造性や編集性に積極的な意味を付与するものなのである。

以上のことは、具体的な英語教育にどのような示唆を与えうるのか。英語教育や教授法、その考え方や方法論的アプローチには様々なものがあるが、その中でも学習者の興味・関心に基づいたプロジェクトによるメッセージの発信をそのアプローチとする「プロジェクト発信型」の英語教育において、Rortyのプラグマティズムは、一定の論拠と新たな意味づけを与えるものであると考えたい。自らの内容を発信することは、Rortyの哲学を踏襲する限りにおいて、単なる自分勝手な「言いっ放し」を行うことではない[15]。堂々とその時々の自分のメッセージを他者に対して継続的に語りかけることで、自らをも成長させ、そのプロセスの中で自己の継続的な「再構築」を行い続けるのである。確固とした基盤がないことは、それは最終的な到達点や、いわゆる「答え」がないことを含意する。しかし解答が不在であるからこそ、同じ事柄や意見でも多様な目的のために多様な方法で記述できる（柳沼、2002、p.153）のである。その際に用いられる言語は、既存の正当性や規範性に対する再構築・再編集を迫るものであってよく、新たな魅力的な語り方の創出にこそ積極的な評価が向けられるべきである。これは、社会言語学が指摘してきた「社会的に弱い立場であればある程、言語を創造性に作り変える」とする議論（Trudgill 1974）が妥当であるとするならば、むしろマイノリティーの発信にこそ積極的な意義を認めるべきであり、そこにおける会話の継続は新たな連帯と希望を生み出すに違いない。その際の英語は、「相互了解性（mutual intelligibility）」に基づく限りにおいてのピジン英語であって全く構わない。ピジン英語を、従来のように規範英語に基礎づけられた正統からの逸脱や間違いとしてとらえる代わりに、積極的に自己のアイデンティティや「文化による編集」が込められたものとして評価し、用いられるよう促すべきなのである。そして言語が通じない状況になれば、その場において理解されるまで粘り強く説得し、相手の寛容さに訴えつつ連帯しようとしさえすればよい。ここにグローバル時代の「英語」の意義がある。語彙はその都度作り変えられ、新たな意味や用法が創造的に用いられ、導入される。この動きが社会や文化の豊かさを生み、同時に苦痛を減少させることにも繋がる。プロジェクト発信型の英語教育とはこうした意味でも再解釈、再評価されるべきであり、新しいパラダイムにおける英語教育の一つの意義ある方法論として、日本の英語教育に新たな方向づけを与えうるものであることを本論文は主張したい。

Davidson（1986）がかつて、「言語」と「この世の中でおしなべてうまくやっていくこと」との境界を否定したように[16]、Rortyは英語教育はおろか、教育やそもそもの体系的哲学が当然前提としてきた「基礎づけ主義」に対し異議申し立てを行った。これは「言語の教育」であるとして考えられている英語教育に（何らかの決められた）英語を当然教えるべきであり、言語学習を通して異文化理解を行うべきであるとする一般的な英語教育への期待や認識をある意味で「裏切る」ものであると言えよう。なぜなら、自文化の発信こそが他者理解の先に来るべき優先事項であり、そこで使用する言語はその時の自らが創り出した語彙であり、それを通して「時代遅れの語彙や態度から解放（Rorty、1979=1993、p.23）」させられることこそがRortyの哲学の核心であり、先の記述に全面的に逆行するものだからである。

ある面でこれはQuine（1960）がしばしば用いる「ノイラートの船 (Neurath's boat)」のメタファーであり、解釈によっては根無し草のように海面を漂流する不安定な英語教育像を意味するのかもしれない。しかし一旦視点を変えて考えてみるならば、そもそも現在の日本の英語教育に対し、その依って立つ土台に根本的な疑問が突き付けられているとは考えられないだろうか。そうであるからこそ、我々はその混沌たる現実に嘆くべきではなく、多様な教育論を肯定し、積極的に現実に対処する中で「希望」を見出すべきなのである。

また別の観点からの批判として、Rortyの希望の哲学を無批判に受け入れることにも注意しなければならない。Rortyの論考はあくまでもアメリカのブルジョワジーにおけるプラグマティストのあり方を論じたものであり、西欧のリベラルな民主主義社会において実現が可能な一つの理想を語るものである。Rortyの論考にはアジアや日本からの視座はなく、またRortyの主張する具体的な教育論が、「プロジェクト発信型」の英語教育と必ずしも呼応しているわけではない[17]。しかしながらRortyがコミュニケーションを語るとき、その文脈において、間文化的なものと内文化的なものとの間の人類学者による区別をも消去しようとしていることには注目したい。すなわち、いかなるフレーミングも程度の問題であり、重要なことはコミュニケーションを行おう、会話を継続させようとする、まさに「信念」や「態度」こそ、コミュニケーションにおける要素として有意な情報になりうることを論じているのである[18]。これは英語教育において、そこに参加する者たちの心の持ちようによって、種々の条件の善し悪しとは異なる実効性を保証する一つの論拠となりうるものである。

Rortyのプラグマティズムとは、未来の英語教育に新たな自信と活力を与えうる可能性を持つものであり、日本から世界に向けられる一層の英語教育研究を発展させる論拠を提供する可能性を大いに秘めている。本論文がそのための有意義な論点を提示し、議論を巻き起こす端緒となることを切に希望する。

3　おわりに

かつて英国が「ケンブリッジ英検」という統一されたスタンダードを広く世界に要求し、米国はそれに対抗して「ミシガン・メソッド」を開発した。これらは彼らの母語である英語を、自分たちにとって都合のよい形で他国・他者に押しつけた、まさに「他者折伏」型（鈴木、1999）のイデオロギーとも言えよう。これらの試験や資格を日本の英語教育が目指す限りにおいては、その根底には究極的な母語話者への同化、あるいはそれへの限りない接近という心的態度があり、評価モデルやその評価尺度にもそうした価値観が反映されている。しかしながら現在、目まぐるしく登場する次世代メディアにおけるコミュニケーション環境は、かつての言語至上主義や活字メディア（書き言葉）に対する特権的地位を変貌させつつある。また一方で政策面でも英語教育に対する「コミュニケーション重視」への流れは1990年代以降その衰えを見せず、発信型の英語教育等、日本独自の言語論・教育論がその注目を浴び始めている（鈴木、2003）。現代という時代が教育の文脈においてもパラダイム・シフトの可能性を秘めているとするならば、日本の英語教育におけるコミュニケーションの概念、非言語メディア（多メディア・多感覚メディア）のコミュニケーションに対する役割、言語メディアの相対的役割（の変容）等、これまで立脚してきた理念・理論そのものをもう一度議論しなければならず、場合によってはご破算にすることも考えなければいけないだろう。すなわち日本の英語教育は、こうした意味でその理念的検討から具体的方法論に至るまで、今後大きな変貌を遂げる可能性を大いに孕んだ岐路に立たされており、そうした際に目指すであろう理念や価値は、欧米に倣ったものである必要はない。むしろ日本、そしてアジアからの英語教育への転換を訴えるべきであり、非母語話者としての英語教育政策を理論的に担保しつつ、それらを一つのパラダイムとして確立し、世界へ向けて発信することは意義のあることとなろう。その際にRortyのプラグマティズム、特にその中でも自文化中心主義と語彙論が英語教育に含意するものは

大きい。Rorty は、我々がそうあるべきだとする「アイロニスト」の条件として、目下使用中の「終極の語彙（final vocabulary）」に対して徹底的に疑い、絶えず疑問に思っていることをその一つに挙げている（Rorty、1989=2000、p.154 ）。すなわち語彙の選択とは、超越的な規準に訴えることを放棄し、個々の語彙が相対的な妥当性しか持たないことを熟知することなのである（渡辺、1999、pp.22-23）。このことは日本の英語教育が闇雲に抽象的で崇高な目標を掲げることで、実質の伴わないイデオロギー論争と、混乱し錯綜した教育現場へと陥る危険から、我々を覚醒させることに繋がる。日本の英語教育は、自分たちが受肉したヴォキャブラリーである日本語、そしてそれと不可分に結びついた日本文化を出発点に、今持てるものを携え、英語の非母語話者として、堂々とグローバル世界に参加し、コミュニケーションしていけばよいのである。そして説得し、説得される寛容さを持つことで可能な限り連帯し、英語という媒介手段を最大限活用することで、自分たちの価値観をできるところから発信する。本論文は Rorty のプラグマティズムを、現状の英語教育における混乱に対する解決策としての、有効な処方箋としての妥当性を議論したものであり、一つの希望を提示したものである。

本論考が訴える対象は、あくまで大学英語の評価に携わる者、具体的には大学英語の授業担当者や、そのプログラムをオーガナイズすることに携わっている者に対してであった。しかしながら本論考の主張やその訴える内容は、必ずしも大学英語という狭い範囲のみにとどまるものではない。広く英語教育、言語教育、そして教育全般に携わる者に対して、本論考が何らかのメッセージを発し、示唆を与えることができたとすれば、筆者にとってこの上ない喜びである。

謝辞

本論文作成にあたって、鈴木佑治先生（慶應義塾大学環境情報学部教授兼大学院政策・メディア研究科委員）には内容全般にわたるご示唆をいただき、懇切丁寧なご指導を賜りました。また松本和彦先生（北陸大学未来創造学部教授）には、哲学的見地から大変有益なご助言を頂きました。ここに記して感謝致します。

注

1 柳瀬（2006、p.18）は日本の英語教育における論考において、近年の日本に関する英語使用の加速度的普及の現状について触れており、「この傾向が進むことは考えられても、反転する兆しは今のところない」と指摘している。

2 靜他（2002、p.54）はコミュニケーション能力の具体的な構成要素に関して、その代表的な複数の理論的枠組みを紹介しつつも、「研究者間で意見が異なる」としている。

3 この「日本英語論」とも言い換えられるイデオロギー上の混乱が教育政策における影響力を持ったことを示す事例の一つが、中村（1989）や津田（1990）らによって切り開かれてきた「英語帝国主義」の主張であり、現在は「英語優越主義」として大津・鳥飼（2002）等によって継承されているものと言えるだろう。この是非を論じることは本論文の趣旨とは異なるため立ち入った検討は行わないが、ここには「英語＝母語話者の所有物」という論理が無前提に想定され、「英語は誰のものか」という議論を超えたところから論考が始まってしまっているところに問題があるように思われる。まずは日本における「英語論」そのものの論点を再考するところから議論が始められるべきであり、その理念を整理し、その応用としての具体的な言語教育論・教育方法論に繋げていくプロセスが辿られるのでないならば、この混乱には一層の拍車がかかるのみとなるだろう。

4 Richard Rorty（1931-2007）

5 ここで論じた言語学と言語哲学の違いについて、丸山（1987、p.3）は以下のように言及し、ある意味で従来の言語学の射程の狭さと、その深みのなさを批判的に論じているように思われる。「…まず、言語学と言語哲学との一番の違いは「意味」の問題だ、というところからはじめましょう。言語学における意味論は、個別言語の中で、意味の分布とか意味領域とかを、すでにあるものとして、私の言う「構成されてしまった構造」すなわちノモス（制度）の中の分析・解析に終始します。これに対して、言語哲学における意味論は、端的に「意味とは何ぞや」と問う、あるいは、「言語以前に世界は分節されているのか否か」という問い方をする」

6 ここにおける記述は、鈴木（2003）に基づき、筆者自身による経験を踏まえた上での独自の論考を加筆したものである。

7 このような意味で「プロジェクト発信型」の英語教育とは、具体的な手法の提示をも含むものであり、形式的な理念にとどまるものではないことは強調しておきたい。なお、実際に現在「プロジェクト発信型」の英語教育を実践している高等教育機関として、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（総合政策学部・環境情報学部）、千葉商科大学政策情報学部、北陸大学未来創造学部がある。

8 冨田（1996、pp.54-55）は、解釈学的転回の哲学的含意について以下のように解説しており、この認識論の転換がいかに大きな哲学的インパクトを持ち得るものであるかを考える上で参考となる。ただし冨田においても、具体的な英語教育における理論的・実質的なインパクトを論じているわけではない。「ローティは、西洋近代の哲学の方向転換を、「認識論的転回」と呼びます。これは、文化の様々な領域に対してその営みの妥当性を判定する認識論が、人間の知的営みの核となるべきだとする方向転換です。その判定は、確固不動のものでなければ用をなしません。ですから、確固不動の知的判断基盤となるもの（つまり「アルキメデスの点」）を求めることが、哲学の中心課題となるわけです。ところが…解釈学的視点からすれば、われわれは「何度も循環を繰り返し、とりあえずこのあたりで手を打つ。そんな、暫定的均衡状態でもって、当面の結論とするしかない」ようです。この解釈学的な全体的情況を、肯定しつつ生きること、これが、認識論志向に取って代わるべきものとして、推奨されることになるわけで、この新たな方向転換を、ローティは「解釈学的転回」と呼ぶのです。この方向転換が、人間観・知識観の大がかりな変更であることは、おそらく感じとしておわかりいただけるのではないかと思います」

9 柳沼（2002、p.157）は MacIntyre（1984=1993、p.266）を引用した議論の中で、「一連のプラグマティズムの哲学（Quine や Rorty の哲学）が…近代の自由主義的個人主義を基礎づけていた「Kant 的な超越論的企て」を覆した」ことを指摘した。これは Rorty の主張が、かつて Quine（1980=1992）や Davidson（1984=1991）が行った「ドグマ」批判の延長線上での議論として捉えることが可能であることを意味し、ヨーロッパに特有の観念論哲学そのものに正面から異議申し立てを行っているとも考えられよう。

10 70 年代に Rorty は Dewey、Heidegger、後期 Wittgenstein、Foucault、Derrida、Gadamer らの所説を援用し、この研究に取り組んでいる。

11 Rorty は自身のプラグマティズムを教育理論やその実践に対し、組み込み応用させた議論を一部で展開している（柳沼、2002、pp.186-189）。しかしながら直接言語（外国語）教育や英語教育に関して言及したものは皆無であり、この含意を探る本研究は一定の意義と貢献を持ち得るであろう。

12 Foucault（1966=1974）は、この「断絶」を彼が議論する歴史性を踏まえ「エピステーメ」という言葉で語っている。これはいわば地層のメタファーであり、時代の進歩性・連続性を拒む概念と言えよう。

13 この表現は Rorty（1991、p.29）における以下の記述を渡辺がまとめたものである（渡辺、1999、p.217 に Rorty からの引用の言及がある）。「我々西洋のリベラルな知識人は、我々は今いるところからスタートせねばならない、そしてこれは、我々が決してまともには受け取れないものの見方が数多ある、ということだ、ということを認めるべきだ」

14 また柳沼（2002、p.174）は、Rorty の主張はあくまでもリベラルな連帯のための自文化中心主義であり、リベラルで民主的な社会においては、開放性や包括性、多様性に誇りを持つため、拡張された会話が必要不可欠であり、その重要性を全く否定していないと指摘する。すなわち Rorty の「リベラルな」自文化中心主義とは、相対主義とパラフレーズされ、普遍主義と概念が対にされる（一般的な意味での）自文化中心主義とその意味論を根本的なところで違えており、このことは Rorty の理解において十分に強調されるべき点の一つであると言えるだろう。

15 ここで日本の英語教育という本論文の文脈において、そもそも日本人である私たちが受肉している語彙とは日本語であり、自文化とは日本文化であることに対して、本論文が主張する英語による発信との整合性を説明しておかなければならないだろう。グローバル時代と呼ばれる 21 世紀において、もはや発信やコミュニケーションのパートナーは日本語を母語とする日本人のみにとどまるものではない。その際、日本語を用いて連帯を試みるよりは、英語を用いた方が社会言語学的な意味において利点が多いという事実を鑑みる限りにおいて英語を用いるのであり、それ以上のイデオロギー的な意味はない。しかも発信の基盤はあくまで日本語による思考であり、価値観であり、本論文は日本語による発信や日本語教育の重要性を否定するものでは全くないことは特に強調しておきたい。なお本論点は十分に議論するに値するものであり、立ち入った議論は別稿にゆずることとしたい。

16 Davidson は、Rorty と同じく、全体論や翻訳の不確定性等を唱えた Quine（1960、1980）の教えに影響を受けた哲学者である。ただし Davidson と Rorty は必ずしもその哲学的見解を同じくしておらず、例えば Rorty の自文化中心主義に対して、Davidson は真理論を唱える。Davidson の「言語の死亡宣告」（戸田山、2002）についての英語教育論的意義については、山中他（2007）にその言及がある。

17 Rorty は、具体的な教育政策に関する見解を述べていることでも知られているが、柳沼（2002、pp.199-202）によると、Rorty

の初等・中等教育に関する新保守主義的な見解に対する反論は少なくない。Rorty は構想として、中等教育までに基礎知識や伝統文化を習得し社会化を修了させ、高等教育からは自己啓発や社会批判を通して個性化を図ることを主張するが、これは中等教育がその後の個性化のための「基礎づけ」にあたるとは言えないだろうか。つまり、この考えが本論考に直接的に適用されれば、それは「プロジェクト発信型」の英語教育は、英語の言語能力（言語的知識）が十分に備わってから行われなければならないことを説くこととなり、矛盾をきたす。従って本論文は Rorty の具体的な教育論を議論することはせず、あくまで彼のプラグマティズムの哲学から、日本における英語教育論への含意を得ることを目的としている。

18　この主張は、Rorty（1991=1988、p.15）に見られるものであり、渡辺（1999、p.221）にも引用されている。「…タスマニアの原住民とイギリス人植民者は、コミュニケーションに苦労したが、この苦労は、グラッドストーンとディズレーリが経験したコミュニケーションの難しさと、ただ程度において違っていたにすぎない。他の人々の見解がなぜわれわれの見解と一致しないかを説明し、その不一致という事実がわれわれの他の信念とうまくかみ合うようわれわれの信念を編み直すこと、これは必ずしも容易なことではない。この難しさこそ、今挙げた事例に共通している難しさにほかならない。実証主義者の分析的真理と綜合的真理の区別を一掃するプラグマティズムの議論（とりわけクワインのそれ）は、人類学者の間文化的なものと内文化的なものの区別をも一掃してしまうのである」

参考文献

大津 由紀雄･鳥飼 玖美子『小学校でなぜ英語 ?』､岩波書店､2002 年。

金谷 憲他編『英語教育評価論 : 英語教育における評価行動を科学する』､河源社、2003 年。

靜 哲人他『外国語教育リサーチとテスティングの基礎概念』､関西大学出版部、2002 年。

鈴木 孝夫『武器としてのことば 茶の間の国際情報学』､新潮社、1985 年。

鈴木 孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』､岩波書店、1999 年。

鈴木 佑治『英語教育のグランド・デザイン』､慶應義塾大学出版会、2003 年。

津田 幸男『英語支配の構造』､第三書館、1990 年。

戸田山 和久「真理条件的意味論と検証条件的意味論」､野本 和幸他編『言語哲学を学ぶ人のために』､世界思想社、2002 年、pp.104 -121。

冨田 恭彦『哲学の最前線 : ハーバードより愛をこめて』､講談社、1996 年。

中村 敬『英語はどんな言語か』､三省堂、1989 年。

丸山 圭三郎『文化＝記号のブラックホール』､大修館書店､1987 年。

柳沼 良太『プラグマティズムと教育 : デューイからローティへ』､八千代出版、2002 年。

柳瀬 陽介『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察 : 英語教育内容への指針』､渓水社、2006 年。

山中 司『コミュニケーションを重視した大学英語教育における発信能力の評価 : 基礎研究と評価モデルの提案』､2005 年度慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科優秀修士論文､慶應義塾大学湘南藤沢学会、2006 年。

山中 司他「コミュニケーション重視の英語教育における言語の役割とは :「言語の限界」に対する理論的考察」､『KEIO SFC JOURNAL』､Vol.6, No.1、2007 年、pp.168 - 185。

渡辺 幹雄『リチャード･ローティ : ポストモダンの魔術師』､春秋社、1999 年。

Bachman, L. F. , *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press. 1990.（大友賢二他訳 ､『言語テスト法の基礎』､ C.S.L. 学習評価研究所、1997 年。）

Bernstein, R. J. *Beyond Objectivism and Relativism: Science, Hermeneutics and Praxis*, University of Pennsylvania Press, 1983.

Canale, M. & M. Swain, “Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing.”, In *Applied Linguistics,* 1 no.1, 1980.

Davidson, D., “On the Very Idea of a Conceptual Scheme” In *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford, Oxford University Press, 1984, pp.183 - 198.（野本和幸他訳「概念枠という考え方そのものについて」､『真理と解釈』､勁草書房、1991 年、pp.192-213。）

Davidson, D., “A nice derangement of epitaphs.”, In E. Lepore ed. *Truth and Interpretation*, Oxford, Blackwell, 1986, pp.433 - 446.

Foucault, M., *Les mots et les choses: une archeologie des sciences humaines*, Gallimard, 1966.（渡辺一民他訳『言葉と物』､新潮社、1974 年。）

MacIntyre, A., *After Virtue: A Study in Moral Theory. Second Edition*, University of Notre Dame Press, 1984.（篠崎榮訳『美徳なき時代』､みすず書房、1993 年。）

Macpherson, C.B., *The life and times of liberal democracy*, Oxford, Oxford University Press, 1977.（田口富久治訳『自由民主主義は生き残れるか』､岩波新書、1978 年。）

McNamara, T.F., *Measuring Second Language Performance*, London: Addison - Wesley Longman, 1996.

Quine, W.V., *Word and Object*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1960.

Quine, W.V.,“Two Dogmas of Empiricism”, In *Logical Point of View: 9 logico-philosophical essays*. Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1980, pp.20 - 46.（飯田隆訳「経験主義のふたつのドグマ」､『論理的観点から : 論理と哲学をめぐる九章』､勁草書房、1992 年、pp.31 - 70。）

Rorty, R., *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979.（野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』､産業図書、1993 年。）

Rorty, R. *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge:Cambridge University Press, 1989.（齋藤純一他訳『偶然性・アイロニー・連帯 : リベラル・ユートピアの可能性』､岩波書店、2000 年。）

Rorty, R. 1982 *Consequences of Pragmatism: Essays: 1972 - 1980*. University of Minnesota Press.（室井尚他訳『哲学の脱構築 : プラグマティズムの帰結』､御茶の水書房、1985 年。）

Rorty, R. “The Dangers of Over-Philosophication.” *Educational Theory*, No.1, Vol.40, Winter, 1990.

Rorty, R., *Objectivity, Relativism and Truth*, Philosophical Papers Vol.1, Cambridge University Press, 1991（冨田恭彦『連帯と自由の哲学 : 二元論の幻想を超えて』､岩波書店、1988 年。）

Trudgill, P., *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*, Harmondsworth: Penguin, 1974.